

古墳をまもる・つたえる・まつることと博物館

Ancient Burial Mounds, Museum, and Public History

吉田泰幸

YOSHIDA Yasuyuki

古墳をまもる・つたえる・まつることと博物館

吉田泰幸

金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究中心 客員准教授

yyasuyuki23@mac.com

Abstract

The definition of a museum is being modified in the international setting led by International Council of Museums, and the responsibilities of museum are expanding to landscapes outside of museum buildings. *Kofun*, gigantic tumuli built mainly in the western part of Japan over a thousand years ago, are the most typical archaeological landscape that still exists in contemporary society. This paper attempts to situate the *Kofun* landscape into the contemporary discussion of museology and cultural heritage studies. The author examines how the *Kofun* landscape is preserved under the imperial majesty which has its root in an ancient era or was restructured at the beginning of the modern era, presented to the public underpinned by archaeological knowledge as modern science, and dedicated by local residents who are engaging in reflexive public history. The imperial *Kofun* landscapes are like a very limited-access and cabinet-type museum. The reconstructed *Kofun* landscapes are turned into open-air museums. A small museum attached to *Kofun* is built as a community hub to maintain the *Kofun* landscape. Analyzing the relationship between *Kofun* landscapes and museums is providing a fine example as to how authentic values of the landscape have been formed, and future museums face with landscapes.

本シンポジウムは文化遺産、特に考古学遺跡・遺産の価値の発信地としての博物館について、考察を深めることを目的としている。筆者はそのケーススタディとして日本列島の古墳と博物館の関係を取り上げる。本論に入る前に、国内外の博物館に関する議論のうち、本稿に関係する点を確認しておきたい。

博物館をめぐる国際的動向

国際博物館会議 (International Council of Museums、以下 ICOM) は、パリを本部として 1946年に設立された。ICOMは様々な種類の博物館とそれらに関係する専門家による組織で、3年に1回、大会が開催されている。前回の 2016年大会はイタリアのミラノで開催された。

ICOMでは大会の度に総会で決議 (resolutions) が採択される。ミラノ大会では 1) 博物館の景観に対する責任 (The Responsibility of Museums Towards Landscape)、2) 博物館における社会的包摂、統合、ジェンダーといった諸問題の主流化 (Inclusion, Intersectionality and Gender Mainstreaming in Museums)、3) 内戦・革命・軍事衝突・テロ発生時、およびその後の文化遺産の保護強化 (Strengthening the Protection of Cultural Heritage During and After Armed Conflict, Acts of Terrorism, Revolutions and Civil Strife)、4) 文化財の国際的貸借の促進と保護 (Promotion and Protection of Cultural Objects on International Loan)、以上の 4 件が決議された¹。

この中で、博物館のあり方に大きな影響を与えるのは、1)であろう。この決議では、博物館は周辺景観に対して特別の責任を持つとされている。これまで博物館が主に調査・研究・保護・保全の対象としてきたものは、館に収蔵された有形 (tangible) の遺産であった。ICOMの2007年ウィーン大会においては、博物館の定義が改定されており、博物館の扱うモノに無形の (intangible) 遺産が追加された²。この時点で博物館の定義は従来よりも拡張しており、2016年ミラノ大会決議では、博物館が責任を持つべき対象は館外の遺産である景観にも及ぶことが明確にされた。これら博物館の再定義が進行していると言える潮流への応答として、日本考古学研究のバックグラウンドを持つ筆者になしうることは何か。そう考えた時に、古墳という「景観」は格好のケーススタディ足りうる。

三つのタイプの博物館

国内的な博物館に関する議論としては、伊藤寿朗氏によって提唱された「三つの世代の博物館論」(伊藤1993)に言及しておきたい。併せて、そのパラフレーズに相当する、博物館情報論の視点から亀井修氏によって提示された三つの「型」の博物館(亀井2008)を参照する。これらは1990年代から2000年代にかけての議論であるが、博物館のあり方と将来の可能性を考察するには、2010年代の現在でも有効な枠組みと考える。

伊藤氏の「三つの世代の博物館論」は『市民のなかの博物館』と題する著作において、第一世代：保存志向、第二世代：公開志向、第三世代：参加志向、として展開された。一部の専門家によって占有されていた博物館コレクションが市民に向けて公開され(第一世代→第二世代)、やがてはそれにとどまらず市民参加によって博物館活動が活発化する(第二世代→第三

世代)という、権威的な博物館から民主的な博物館への過程を図式化したものである。1980年代に構想され、90年代に提唱された第三世代：参加志向は、当時は実現していない理想像としての概念だった。しかし、今や各地の博物館において、参加志向の実践は様々な形で行われている。したがって、2010年代においては、第四世代博物館をまだ見ぬ理想形として議論すべきなのかもしれない。一方、「世代」というネーミングは、博物館の性格が移り変わっていくような印象も与えている。2019年4月から施行される改正文化財保護法³の中で、文化財の「活用」が前景化されるようになると、「活用」の前提として「保護」が最も重要、あるいは両者のバランスが重要という反応が各所から出ている。「活用」は伊藤氏の言う第二・第三世代の志向に近く、「保護」は第一世代の志向に近い。両者を「保護」から「活用」という世代的な変化と捉えるよりも、博物館の活動は保存をコアとし、それに加えて公開と市民参加という二層が加わった博物館像が求められているとした方が、「保護」か「活用」か、という二項対立の議論を避ける上でいいかもしれない。

亀井氏の博物館における三つの「型」は、19世紀型：キャビネット型、20世紀型：万国博覧会型、21世紀型：コミュニケーション型、というもので、情報のストック、フローの視点から博物館を分類したものである。「世代」ではなく「型」という表現になっているとおり、これら三つの博物館は今も並存しているという現状分析をもとにしているだろう。同時に、19世紀から21世紀における博物館の歴史批評の性格を併せ持っている。近代博物館の起源はよく指摘されるように「驚異の部屋」(Wunderkammer)や“Cabinet of Curiosity”にあり、これらへのアクセスは特権階級が独占していたが、19世紀末から20世紀初頭、すなわち近代初期の万国博覧会の隆盛とともに、各地で市民への公開を前提として近代的な博物館が建設されるようになった。そして21世紀の今では、市民参加、博物

¹ <http://icom.museum/the-governance/general-assembly/resolutions-adopted-by-icoms-general-assemblies-1946-to-date/milan-2016/> (accessed on 7 May 2018)

² 以下のページで改定履歴を参照することができる。
http://archives.icom.museum/hist_def_eng.html (accessed on 7 May 2018)

³ <http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/1402097.html> (accessed on 6 June 2018)

館を取り巻く人々とのコミュニケーションによって博物館のこれまでのあり方自体が再考され、今後のあり方も議論されるという図式である⁴。キャビネット型は特定階層のコレクションの独占、万国博覧会型は市民社会と啓蒙主義の台頭、コミュニケーション型は成熟した近代社会が背景にあり、前近代・近代・後期／ポスト近代、それぞれの社会における博物館の特徴を要約したものにもなっている。

以上の国内外の博物館に関する議論をもとに、本稿では遠い過去に構築され、現在までもその形をとどめ、現在の景観の一部となっている「古墳」と博物館との関わりを、「三つの世代の博物館論」、博物館の三つの型を参照しながら以下に述べる。そのことをとおして、考古学遺跡の価値の発信地としての博物館の現状を批判的に概観しつつ、その可能性についても見通したい。

考古学的な古墳

「古墳」とは字義上は古代の墳丘だが、日本列島史の時代区分名称ともなっている。主に3世紀後半から6世紀後半にかけて、西日本を中心に築造された墳丘を指す。時期的に古墳時代に先行する弥生時代にもマウンド状の墓があるのは知られているが、それらは考古学的用語では「墳丘墓」として区別している。

考古学研究の上では、3世紀において大型の前方後円墳という墳丘が畿内を中心に築造されるのを画期として、それ以前の墳丘と一線を画する「前方後円墳体制」が成立し、その様相に古代国家ともいべき政体の発生をみることが多い（例えば都出2000を参照）。古墳時代以前の時代区分は古い順に旧石器・縄文・弥生時代だが、その順に社会進化論的図式が描かれることも多い。狩猟採集が主とされる旧石器・縄文時代から、朝鮮半島からの水田稲作システムの導入がなされた弥生時代、古墳時代においてそれらのシステムの改良を経て安定した経済基盤のもとに、基本的に集団墓である縄文・弥生時

代とは異なり、古墳時代においては一人あるいは少数の人物のための巨大な墳丘、モニュメントを築造する段階に達するというものである。

本稿では、古墳が集中的に分布する地域・畿内に、やがては古代王朝が形成される、つまり、古墳時代は「日本史」の一部ともなっていること、それが現在までその姿をとどめている古墳という遺産の管理にも影響を与えていることに着目したい。

古墳をまもる（まつる）

ここでは、古墳の中でも陵墓を保存志向、キャビネット型の景観として捉える。施設としての博物館は関係しない（あるいは後述するように不可視な）ものの、まもられている（と同時にまつられている）景観である。

日本の歴代天皇・皇族の墓は陵墓として、宮内庁が管理している。宮内庁は897の陵墓や陵墓参考地を管理しており、そのうち121基の墓が上述の古墳時代に築造されたものとされている⁵。古墳時代というのは一千数百年以上も前のことであり、巨大なマウンドに葬られている人物＝古墳の被葬者というのは、古文献と口頭伝承をもとに「推定」されている。現在の陵墓の制度化は近代初期に行われた⁶。その過渡期においては、陵墓の可能性のある古墳を調査すること自体が論争的となった他、今では立ち入ることができない陵墓参考地に英国出身のお雇い外国人であるウィリアム・ガウランド（William Gowland）が立ち入り、測量調査を行った例もある（ハリス・後藤編2003）。

ある古墳が特定の天皇・皇族の墓であるという記録は、一千数百年以上の時間が経過する中において混乱もみられ、陵墓に対する価値観も一定ではなかったことを示している。なおかつ、その実在が疑問視される半ば神話上の人物

⁵ これらの数字は松田陽氏が宮内庁ホームページや国会議事録を参照した結果（松田2014）によっている。

⁶ 本稿における陵墓の歴史やそれらをめぐる議論についての記述は、高木2000および高木・山田編2010によるところが大きい。両文献においては、古墳の考古学的研究における成果のみならず、その後の中近世、近代における陵墓の扱われ方、認識の変化などを広範に知ることができる。

⁴ 吉田憲1999も近代博物館の成立とその背景を詳述している。吉田憲司氏は現代的な博物館として「フォーラム型」を提唱している。

の墓とされている古墳もある。1945年以降に近代科学としての考古学として再出発をはかった日本考古学の特徴の一つは、形態学的検討に基づく精緻な編年研究である。その方法論は古墳にも応用され、その成果からみると、古墳の築造年代と陵墓の被葬者に関する記録・推定の間には齟齬がみえてくる場合もある（例えば森1965等、古墳時代研究者は繰り返しその齟齬を指摘し、考古学的成果と被葬者推定の関係を検討している）。そのため、日本考古学協会をはじめとした複数の学術団体は陵墓の発掘とは言わないまでも、古墳の基礎的な情報確定に繋げるための立ち入り調査の許可を宮内庁に求め続けている。宮内庁は部分的な公開に応じているが、その範囲は限定的で、宮内庁が公表する報告書などが、陵墓についての主要な学術的情報であるという状態が続いている。

以上のように、学術的な価値を明らかにするという点では、考古学における陵墓は論争的な存在であるが、ここでは博物館が特別の責任を持つべきとされた景観としての陵墓を、博物館学における第一世代の保存志向、キャビネット型の景観として位置付けたい。考古学における発掘調査は、一回きりの解剖実験という比喩がよく用いられる。また、遺跡破壊と表裏一体とも表現される。遺跡の究極の保存は、発掘調査すらも行わないことであり、通常、遺跡保存といった場合は最低限の調査を行い、ある程度遺跡の範囲を確定した上で、それ以上の調査を行わないことでなされる。言い換えれば、ある程度学術的に裏打ちされた情報を得て遺跡の評価を確定した後、さらなる発掘調査を半永久的に保留し続けることで、遺跡保存は成立している。このように、考古学遺跡の保存は、本質的にアンビバレンツなものでもある。こうしてみると、陵墓というのは、古代に由来を持つ権威（あるいはそれをもとに近代以降に再構築された権威）によって強力に「保存」されている景観である。ただし、その保存の範囲は墳丘のみで、その一歩外は開発による破壊に晒される場合がある。そして、陵墓の学術的な情報は宮内庁がほぼ独占的に管理しており、陵墓という景観に責任を持つ博物館は多くの人にとって半ば

不可視であるという諸特徴の上に成り立っている保存と言い換えることもできる。

古墳をつたえる

次に、公開志向、万国博覧会型の古墳として、兵庫県神戸市の五色塚古墳を例にあげたい。同古墳は築造当時の学術的成果をつたえるために墳丘自体が野外博物館化した景観となっている。

五色塚古墳は4世紀後半から5世紀前半に築造された前方後円墳と考えられている。全長は194m、後円部の高さは18mにおよぶ。同古墳は築造当時の姿に復元された古墳の最初の事例としてよく知られており、松田陽氏によるパブリック・アーケオロジーの観点からみた古墳と現代社会の分析において、中心的な事例のひとつとして取り上げられている（松田2014）。松田氏はその後、現代における古墳のあり方を理解するために「古墳のバイオグラフィー」という手法を提唱している（松田2017）。この手法は古墳がその築造以降現在まで、どのように認識されてきたのか、古墳の価値はどのように移り変わって来たのかの検討も含んでおり、本シンポジウムの中心課題である遺産の「価値」を考える上でも有効と考える。以下、松田氏論考を適宜参照する形で五色塚古墳のバイオグラフィーの特徴を述べる。

五色塚古墳のバイオグラフィーで興味深いのは、18世紀には天皇陵と認識されていた時期があったことである。その認識が続けば、同古墳は今のような姿にはなっていないだろう。この古墳は1921年には早くも国史跡に指定されている。ただしその後も、20世紀前半には墳丘に稲荷社が存在し、斜面は段々畑として利用された時期もあったとのことである。そして1965年から10年かけて史跡整備のための調査が続けられ、葺石に覆われ、埴輪列が墳丘をめぐる造営当時の姿に復元された。加えて、後円部斜面に設置された階段を登って、墳頂から明石海峡をのぞむ眺望を楽しむことができる。

筆者は五色塚古墳という景観を博物館の第二世代：公開志向と位置付けるが、この場合「公開」しているものは、学術的調査の結果明らか

になった造営当時の姿である。同時に、それは学術的価値を持ちつつも、あくまでも復元という再現行為の結果であり、万国博覧会において一時的に建てられるパビリオンが半恒久化したとでも言い得る、ハイブリッドな景観でもある。また、こうした公開の副作用として、神社との関係が変化することに着目したい。古墳が神社の敷地内にある事例は多くある。五色塚古墳の場合も、いつときは墳丘の上にあった稲荷社が整備に伴って移動されていることを松田氏が指摘している。

同様の事例は石川県鹿島郡中能登町の雨の宮古墳群において、ジョン・アートル氏が言及している (Ertl 2015)。雨の宮古墳1号墳は、4世紀中頃～後半の築造と考えられている全長64mの前方後方墳である。この古墳の前方部には神社が、後方部には神事としての性格が色濃い相撲の土俵がかつてはあったが、1990年代の史跡整備のための発掘調査の後、近隣に博物館が建設されてからは、古墳には五色塚と同様に登頂を容易にするための階段が設けられ、後方部には発掘調査の成果としての埋葬施設の復元展示が設置されている。そして現在では小さな社が前方部の側にある。

五色塚、雨の宮古墳ともに、学術的成果を広く公開するために野外博物館化された古墳と捉えることができる。陵墓と異なり登頂することができ、登頂を容易にするために造営当時にはなかった近代的な階段が取り付けられている。

古墳をまつる

参加志向、コミュニケーション型の例として、愛知県犬山市の青塚古墳を取り上げる。同古墳は、陵墓とはまた違った形でまつられている景観になっている。

現在の青塚古墳のあり方については、金沢大学国際文化資源学研究所主催の文化資源学セミナー「さよなら、まいぶん」において、青塚古墳の管理を委託されているNPO代表の赤塚次郎氏をゲストスピーカーとして招いた議論の中でも触れられている (赤塚2017、吉田泰2017、吉田泰編2017)。それらを参照しながら、同古墳の景観の特徴を述べる。

日本の文化財行政の中では、文化財の管理者は基本的には行政である。五色塚、雨の宮古墳と同様に国史跡となっている青塚古墳も、古墳が所在する犬山市が管理主体だが、現在ではその管理はNPOニワ里ねっと⁷に委託されている。日本はおそらく、世界的にみても行政主導の文化財の保護・管理がよく整備されている国のひとつである。前項の五色塚、雨の宮古墳の例はその成果の好例でもある。一方で、行政主導の史跡整備が景観の価値を広く共有するために万能というわけでもない。青塚古墳の場合は、古墳と行政の間にNPOが介在することによって、周辺住民の参加とコミュニケーションが変化し、その結果生じた後述するような古墳と周辺住民の関わり方が青塚古墳を参加志向、コミュニケーション型と位置付けた理由である。

青塚古墳は全長123m、後円部の高さは12mの前方後円墳であり、4世紀中頃に築造されたと考えられている。青塚古墳は五色塚古墳のように造営当時の姿に復元されたわけではない。墳丘の表面は草に覆われており、底部に近い斜面には朱塗りの壺型埴輪が並ぶ様子が復元されている。公園内の片隅には、小さな博物館がある。この博物館はNPOの管理以前から存在していた。現在では、内部の展示などは細かなアップデートが継続中である。青塚古墳は、NPOニワ里ねっとが管理するようになってからは、基本的に登頂禁止であることをより強調するようになってきている。その理由は、今でも古墳は近隣に所在する大縣神社の社有地であることと、古墳の主体部は発掘されていない、言い換えれば、暴かれていない人の墓として機能しているものだからである (図1)⁸。

青塚古墳は基本的には登頂禁止だが、例外的

⁷ 正式名称は「古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク」である。

⁸ 青塚古墳の墳丘斜面に立てられている登頂禁止の看板のいくつかは、NPOニワ里ねっとの管理前から立っていたと考えられるものがある。個人的な経験としては、NPOニワ里ねっとによる管理が始まる前、今よりも閑散とした青塚古墳公園を訪れた筆者はそうした看板には気づかず、青塚古墳の墳頂に登頂したことは「白状」しなければならない。



図1：青塚古墳の登頂禁止の看板（筆者撮影）

に登ることができる。地元小学生が団体で見学を訪れた時や、後述するような古墳公園でイベントが行われるときである。また、例えば筆者が留学生も含む大学院生を引率して研修の一環として訪問する時などには、学芸員による古墳の学術的な知識に関するレクチャーを受けた後、登ることができる。その他、後述するように地域の人々が古墳の清掃、草刈り活動をする時などである。ただし、登頂するに際しては条件がある。神社の土地、人の墓であることに敬意を払い、古墳に登る前に脱帽し、お辞儀をすることである（図2）。筆者は、青塚古墳のこの方針を「登ってはいけない」というタブーを設定することによる「再聖地化」と考えているが、この例を考古学者、特に埋蔵文化財行政に関わる考古学者に紹介すると眉をひそめる人もいる。史跡整備の後に万人に楽しんでもらう、



図2：青塚古墳に登頂する前には、古墳に向かって深くお辞儀することが必要（野澤豊一氏撮影）

右から二人目は筆者、留学生向けに写真一番奥の学芸員の説明を通訳していたためにお辞儀するタイミングが遅れた。この直後、この写真の撮影者ともどもお辞儀した。

あるいは調査の成果を知ってもらうという埋蔵文化財保護行政の思想とは逆のベクトルであり、青塚古墳の存在は多くの考古学者が公開を求めているが部分的にとどまっている陵墓に原理的には近づいているという側面もあるからだろう。ただし、上記の管理方針は歴史的経緯が全く無視されている訳ではない。古墳が築造された時には、その地域の人々にとって聖なる場所であったことは確かであろうし、戦国時代には墳丘が砦として再利用されたこともありながら、神社の土地になり、その後国史跡に指定された。前項までに検討した陵墓の形成過程や五色塚、雨の宮古墳にもみるように、古墳のバイオグラフィーを仔細に検討すればするほど、あらかじめ古墳はこうであるべきという姿は存在せず、古墳に関わる人々がその都度、その性格を選んできたのである。

青塚古墳のこれらの方針—基本的には登頂禁止、周辺住民とともに清掃活動を行うこともある、古墳にいま眠る「王」へ捧げるお祭りの開催—は、赤塚氏が文化資源学セミナー「さよなら、まいぶん」中の対話で述べているように、地域住民にとっての青塚古墳の存在を知る機会があり、そこに着想を得て、地域にとって大事な古墳にするにはどうしたらいいか、という視点から、いわば赤塚氏が設計したものである。赤塚氏は地域の人々の青塚古墳への認識を聞いた当時のことを以下のように述懐している。

しかしある時、地域の集会があって、夜にその集会に呼ばれて、私が説明に行った時に、全く予想外のことを地域の住民の方に言われました。それは、昔、ここの古墳は我々地域のものが守ってきた。そのとおりなのです。地域の人たちが草を刈ったり、山焼きをしたりして古墳を守ってきたのです。そうした歴史がある。けれども、史跡整備で、国なり市が取り上げて、史跡公園にした、だから地域の人たちはあの公園には、立ち入ってはいけない、触れてはいけない公園だと認識している。だから誰も行かんよ、と言われた。その時、僕はカーンと、頭を殴られたような気になりまして

ね。そこからです。出発点はこの一言でした。そうではないな、地域の人と一緒に、その場所を作っていく、この場所はこういうところだということを知っていただいて、一緒にやっていく。そのことがない限り、何もできないな、と思いました。(吉田泰編2017: 251)

青塚古墳公園では筆者の知る限り、古墳型の茶菓子振る舞う野点が開催されたり、古墳に隣接する博物館内でジャズCDを流し、それを聴きながらひたすら古墳を愛でる「古墳よ、JAZZを聴け」といったイベントが開催されている。それらは、文化財行政で重視される学術的価値の発信とはかけ離れたものではある。しかし、これらのイベントが古墳公園の周辺の人々、加えて筆者のような出身地の愛知県を離れて一定の時間が経った人々をも惹きつけているのも確かなのである。また、公開志向、万国博覧会型の典型例として取り上げた五色塚古墳においても、松田氏が紹介するように、同古墳をパワースポットのようにとらえる人々があらわれ、学術的コンテクストとはかけ離れたイベントが企画され、それらに人々が集っている(松田2015: 147)。また、2006年からは高齢者の生活向上支援や子供の健全育成を掲げるまちづくりNPO輝かすみが丘が、神戸市教育委員会から同古墳の管理を委託されている。ランドマーク化した古墳という景観は、さまざまな活動を誘発する機能がある。

古墳という景観と博物館

最後に、篠沢健太氏による建築の観点からの景観に関する議論(篠沢2017)を参照しながら、古墳という景観と博物館の関係について考察する。

篠沢氏は景観としての建築は時間の経過とともにその機能が低減していくものの、さまざまな契機で再活性化されることをあらわしている様子を4種類に図式化している(同2017: 1中の図1)。撤去され、更地を経て建て替えられる「スクラップ&ビルド」、機能の低下を補いつつ建築としての空間(機能)を維持する「文

化財保護」、一定期間ごとに隣地に建替え、形は継承されるが材料は新しい「式年遷宮」、以上3パターンに加えて、古墳を取り上げ、古墳は「(古墳が建築かどうかはさておき)、施工時の石張りのファサードが失われ、千年の時間のなかで植生遷移が進んだ姿が現代の姿」としている。篠沢氏の議論で興味深いのは、通常、建築家が「建築」と言う場合には近代以降の建築家の思想が体现されたもののみを指し、「建物」、「建築物」とは区別される、つまり建築を狭義に捉えることが多いが、建築を広義に捉え、ある空間に配置されること(=景観であること)を重視し、そこに時間経過における景観の機能の低減をみるところにある。

ただし、古墳が一千数百年以上もそこにあり続けたことで本来の機能が失われ、つまり誰の墓かもわからなくなり、自然環境と一体化するという図式は、古墳全般に当てはまることではない。確かに、そういった図式で理解できる古墳はあるかもしれないし、そのとおりのことはあったかもしれない。さらに、古墳が神社の敷地内にある例も多く、神社という聖地のなかで、「鎮守の森」化していくというのは理解しやすい。しかし、陵墓は近代初期に制度的に陵墓と位置付けられる過程において、誰々の墓である、という本来の機能が重視されるようになり、さらにその植生も意識的に構築されたものであることが知られている⁹。また、五色塚古墳や雨の宮古墳のように、公開を前提とすることが決定して以降に、景観の大幅な改変が行われることもある。青塚古墳のように、古墳が草に覆われた状態であっても、それは継続的な景観管理の賜物である場合もある。つまりは、古墳という景観の変化は植生への遷移が進むという概念だけでは捉え難く、それに関わる人々の意志によって再活性化され変化してきた歴史がある。ここで再活性化されているものは何かと考えた時には、篠沢氏の図式における「機能」は、本シンポジウムで重視されている「価値」に置き換えていいかもしれない。「スクラップ

⁹ 近代初期の陵墓の整備において「森厳さ」を強調するようになったことは高木2000において詳述されている。

&ビルド」の景観はその度に新たな価値を提示しており、「文化財保護」は修復によって価値の低下を補っており、「式年遷宮」は近い場所に建て替えられるたびに景観の価値を復活させるという図式である。これを踏まえれば、古墳の一部、少なくとも本稿で取り上げた古墳という景観のあり方は、特に近代以降においては、篠沢氏の分類では「文化財保護」型に近いながらも、人々によって手が増えられるタイミングで、価値そのものが変質していると捉えることができるだろう。そして、それらの変化のありようには多様性があり、博物館という制度と思想も介在している。

陵墓は宮内庁による管理の独占が進む中で、研究団体や市民社会と引き離され、キャビネット化した景観の中でまつられる、と同時に保存される。五色塚古墳や雨の宮古墳のような古墳は野外展示物化＝博物館化し、学術的成果を公開し、市民社会につたえている。青塚古墳においては隣接する博物館が地域社会や様々なステークホルダーの結節点となり、彼らによってまつられている。それぞれの古墳の景観のあり方は、さまざまなスケールの共同体の合意の結果でもある。象徴天皇制とそれにまつわる諸制度を維持するという（様々な議論はあるが結果的としては）国民レベルの合意でもあり、文化財保護行政に一定の価値を見出す研究者らをはじめとした共同体の合意の結果として五色塚古墳、雨の宮古墳の2010年代現在の景観は生み出されており、NPOニワ里ねつとに集う人々の合意の結果として同じく2010年代の青塚古墳の景観は存在する。これらの景観が、将来的に今と同じ姿で「保存」されるとは限らない。人々のコミュニケーションの結節点として古墳という景観のあり方は様々なタイミングで選択、構築され、その価値も固定されたものではない。このことは、古墳という景観が意識された瞬間から、古墳という景観のあり方は不可避免的に参加志向、コミュニケーション型だった、ということも同時に示している。

本シンポジウムで強調された考古学遺跡・遺産の価値の発信、それに際して本来のコンテクストを重視するといった場合にも、その「価値」

はどのようなコミュニケーションの結果なのか、長い景観の歴史の中で、どの時点で「本来的な」コンテクストとして価値をおくのかを問うことが必要だろう。それらを経て初めて、博物館が特別な責任を持つべき、とICOMで決議された景観と博物館の関係について、その将来の可能性も展望できることを古墳という景観は物語っている。

引用文献

- 赤塚次郎. 2017. 文化遺産を機能化するNPOセクター. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016. 吉田泰幸・John Ertl 編. 210-223. 金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.
- Ertl, John. 2015. Traversing the Landscape and Boundaries of Japanese Archaeology: Ethnography of Archaeological Practices at Amenomiyama Kofun. In *Reframing Diversity in the Anthropology of Japan*. John Ertl, John Mock, John McCreery, and Gregory Pole eds. 29-53. Kanazawa: Kanazawa University Center for Cultural Resource Studies.
- ヴィクター・ハリス, 後藤和雄 編. 2003. ガウランド: 日本考古学の父. 東京: 朝日新聞社.
- 伊藤寿朗. 1993. 市民のなかの博物館. 東京: 吉川弘文館.
- 亀井 修. 2008. 博物館における情報. 博物館経営・情報論. 佐々木亨・亀井修・竹内有理 編. 178-193. 東京: 放送大学教育振興会.
- 松田 陽. 2014. 古墳とパブリックアーケオロジー. 古墳時代の考古学10: 古墳と現代社会. 一瀬和夫・福永伸哉・北條芳隆 編. 144-161. 東京: 同成社.
- 松田 陽. 2017. 古墳と地域社会の近現代史. 遺跡学研究 14: 24-33.
- 森 浩一. 1965. 古墳の発掘. 東京: 中公新書.
- 高木博志. 2010. 陵墓と文化財の近代 (日本史リプレイト97). 東京: 山川出版社.

高木博志・山田邦和 編. 2010. 歴史の中の天皇陵. 京都: 思文閣出版.

都出比呂志. 2000. 王陵の考古学. 東京: 岩波新書.

篠沢健太. 2017. ランドスケープは「記念」する. 建築雑誌 132-1700: 20-21.

吉田憲司. 1999. 文化の「発見」: 驚異の部屋からヴァーチャル・ミュージアムまで. 東京: 岩波書店.

吉田泰幸. 2017. 「さよなら、まいぶん」をふりかえる. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016. 吉田泰幸・John Ertl 編. 255-262. 金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.

吉田泰幸 編. 2017. 対話: さよなら、まいぶん. Japanese Archaeological Dialogues: 文化資源学セミナー「考古学と現代社会」2013-2016. 吉田泰幸・John Ertl 編. 240-254. 金沢: 金沢大学人間社会研究域附属国際文化資源学研究センター.